

聖書：コリント人への手紙第一 13：1～7

説教題：愛がなければ

日時：2022年11月27日（朝拝）

コリント人への手紙第一 13 章は「愛の章」として有名です。しばしば結婚式で朗読されたり、説教されたりします。美しい章で、読むだけでインパクトがあります。しかしそのあまり前後の章とのつながりがあまり意識されず、ここだけ切り取って覚えられている場合が多いかもしれません。前回見ました通り、この 13 章は 12 章と 14 章の間に挟まれた章です。12 章と 14 章は御霊の賜物について語っている章でした。直前の 12 章 31 節では「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい」と言われました。しかし、ただ賜物のことだけを考えてはならない。そこでパウロは今日これから見る 13 章のことを語ります。コリント人たちは賜物を巡って混乱状態にありました。他の人と比べて互いに誇ったり、見下し合ったりしていました。本来私たちは賜物の違いをもって互いに支え合い、助け合い、補い合って豊かな一致に生きるべきなのに、コリント人たちは賜物のことで競争し、争い、分裂に至っていました。そんな彼らにパウロは 12 章 31 節後半で「私は今、はるかにまさる道を示しましょう」と言いました。それがこれから見る 13 章の「愛」という道です。パウロが言いたいことは賜物は愛とセットで考えられなければならないということです。愛がそこに伴っていないなら、どんなに優れた賜物を持っていても役に立たない。そのことが 13 章で語られます。

まず 1 節でパウロは「たとえ私が人の異言や御使いの異言で話しても」と語り始めます。これまで異言は賜物のリストの一番最後に出て来ました。それは異言を特別視するコリント人たちの姿勢に水を差すものでした。しかし今度は異言が一番先に取り上げられます。この後の話では、賜物だけでは十分でないと言われます。そういう場合は異言が先に来るのです。いかにこの異言がコリント人たちの間の問題であったかが伺えます。ここに「人の異言」に加えて「御使いの異言」とあります。これは当時、特に霊的な人は「人の異言」のレベルを超えて「天使の異言」を語る者となると言われていたことと関係するようです。そのことを指してパウロは言います。たとえ天使の言葉を話すことができても、「愛がなければ、騒がしいどらや、うるさいシンバルと同じです」と。異言は 14 章 2 節で語られますように、神に向かって語る言葉であり、そのままでは周りにいる人々に理解できない言葉でした。その異言を話す人は礼拝の

中で得意がって、これ見よがしに、熱狂的に話したようです。そのコリント人たちにパウロは言います。愛なしにそれをするなら、それは何の益ももたらさない。それは騒がしいどらやうるさいシンバルと同じであると。音楽の中で「どら」や「シンバル」は適切に用いられれば素晴らしい効果を発揮しますが、ここで言われているのは「騒がしい」どら、また「うるさい」シンバルです。それは益どころか、害をもたらすもの、人々が聞きたくないと思う雑音、ノイズでしかないということです。

2節では「預言」が取り上げられます。この後、14章では異言よりも預言がまさると言われます。パウロは、この預言の賜物を特に求めよ！と後に言います。しかしその預言さえも愛によらなければ同じです。またあらゆる奥義とあらゆる知識に通じていることもそうです。神の救いに関する深い理解と洞察力を持ち、体系的な知識を持っていても、愛がなければ何の良いこともない。また、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、とも言われます。イエス様が福音書で言われた通り、これは神が奇跡的なみわざをなさるために用いられる人が持っている祈りの賜物です。それも愛がなければ意味がない。人々に強い印象を与え、アッと言わせることができても何にもならない。それはゼロであると言われます。

そして何と言っても衝撃的なのは3節です。「たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても」とあります。つまりこれは全財産を施すこと、持ち物全部を差し出す犠牲的奉仕をすることです。さらに「たとえ私のからだを引き渡して誇ることもなくても」とあります。そこには印がついていて欄外に、異本として「私のからだを焼かれるために引き渡しても」とあります。第3版まではこちらの訳が本文に載っていましたので、この訳に親しんでいる方も多いかもかもしれません。これはこのギリシャ語がカウケーソーマイとなっているものと、カウセーソマイとなっているものの2種類があって、どちらを本来のものとして取るかによって変わります。今回、新改訳2017で採用された方がやや有力と見られているようですが、第3版までの訳の方を支持する学者も多くいます。どちらであっても意味は大きくは変わりません。ある人は自分の財産全部をささげるだけではなく、自分のいのちまでもささげる行為をするかもしれません。そうすることを誇りとし、喜びとして、実行するかもしれません。しかしもしそれが愛によってなされていないなら、それは何の役にも立たないと言われます。「焼かれるためにからだを引き渡す」という異本を選ぶならなおさら衝撃的です。人は誰かのために、あるいは何かのために、火の中に身を投ずることをするかもしれま

せん。いのちを捨てるかもしれません。しかし愛によってそれがなされたのでないなら意味はない、何の役にも立たないと言われていました。

私たちはここから、私たちのすることすべてに価値を与えるのは愛がそこにあるかどうか、愛によってそれをしたのかどうか、であることを知ります。私たちは愛によらないで物事を行うこともできます。しかしそれでは、そこに真の価値はないと言われていています。私たちの生活を振り返ってどうでしょうか。私たちも毎日色々なことをしていると思います。しかしそれをただ義務感でやっていることはないか。ぶつぶつ文句を言いながらしていることはないか。それではいくら立派なこと、大きなことをしても何の意味もありません。あるいは自分の利益のために、自分に都合がいい時だけ行動するということはないか。それでは何の褒められたこともありません。他者の益に真に仕えるという価値ある働きをしたことになりません。私たちは果たしてパウロが言う「はるかにまさる道」を自分は進んでいるのか、もう一度自らを探って調べてみる必要があるのではないのでしょうか。

続く 4～7 節には愛のいくつかの特性が述べられています。ここに色々な表現があります。ここを読んで分かることは、愛とは単なる感情やセンチメンタルな気持ちではないということです。それは私たちの実際的な行動や振る舞いと関係します。またこの言葉はみな現在時制で表現されています。ですから時々こうすれば良いということではなく、いつも、継続的に、こうするのが愛の特性であるということです。

まず最初に述べられているのは「寛容」と「親切」です。「寛容」とは、人が私に悪を行った時、どう対応するかに関わるものです。それはすぐ怒らないことです。感情が爆発するのを許すまでに長い時間をかけることです。これがまず先に来ています。愛について考えるなら、まずこのことを考えなければならないということでしょうか。一つ目が受動的なものなら、二つ目の「親切」は積極的な態度です。ひどいことをして来る人に対して寛容であるだけでなく、親切にすることです。やられたからやり返すのではなく、善を返すこと。相手にとって良いことを考え、そのように行動することです。

続いて 8 つの否定の言葉が並びます。ここから、愛するとは積極的に何かをすること、目立つ派手なことをすることだけではないと知らされます。むしろこれから見る

ようなことを「しないこと」が「愛」だと言われています。その一つ目は「人をねたまない」。誰かの成功を見て嫉妬しない。機嫌を悪くしない。むしろ喜ぶ人とともに喜ぶことです。次は「自慢せず」。私たちは他の人をねたむ時、ともすると自分を大きく見せようとしています。つまらないものを膨らませて、自分が大きな存在であるかのように見せようとしています。次の「高慢にならない」も似ています。高慢とは自分を立派な人間であると自負して、偉ぶることです。自分は人々より高い位置にいると考えて、周りの人々を見下ろすような言葉を使い、またそのように行動することです。

5 節に行って「礼儀に反することをせず」。人は高ぶると礼儀を忘れます。周りの人々を敬い、配慮することを気かけなくなります。この手紙では、たとえば女性のかぶり物のところで、これに該当することが言われました。ある女性たちは「自分たちは今や聖霊に導かれた新しい人間である。なぜ従来の慣習に縛られる必要があるのか」と言って、かぶり物を取って礼拝や奉仕をしました。今日への適用においては難しい面がありますが、当時においてそれは礼儀に反することでした。愛によるなら別の道があったはずですが、愛は礼儀に反することをしません。また「自分の利益を求めず」。これは自己中心的でないこと、利己的でないことです。この手紙の中では、ある人たちが聖餐式と一緒に行われた愛餐会で「我先に！」と食事をしていたことが語られました。それは特に裕福な人たちでしたが、彼らは自分の欲求を満たすことを優先していました。愛はそのように自分の利益を第一に求めて行動することはしない。次に「苛立たず」。これはナイフの刃から出た言葉で、敏感に反応することを意味するそうです。すぐカッとなり、直ちに報復しようとすることです。コリント人たちの間で、これは彼らが訴訟好きだったことに現れていました。すぐ法廷に訴えて解決しようしました。愛はそのように苛立つことをしない。また「人がした悪を心に留めず」。これは「数える」とか「記録する」という意味の言葉です。つまり人が私に行った悪をしっかりと心に書き込んで忘れないこと。いつかその復讐をする機会を！と心の中で願っていることです。愛はそういう態度は取らない。

そして6 節に最後の否定形、「不正を喜ばずに」と、それと対の「真理を喜ぶ」がセットで語られています。ここに愛は真理とともに進むことが言われています。愛は相手を愛するからと言って、不正をよしとすることはしません。正しくないことは正しくないとするのが愛の性質です。愛は真理を喜ぶのです。

最後 17 節で 4 つの言葉に「すべてを」が付けられて強調されています。これはそこに限界がないこと、限界を設けないことを示していると考えられます。あるいはこれは「いつも」とか「常に」という意味にとることも可能です。この 4 つは 1 つ目と 4 つ目がペアで、2 つ目と 3 つ目がペアとなっています。まず 1 つ目の「耐え」と 4 つ目の「忍ぶ」は、4 節最初の「寛容」と関連します。最初と最後に、忍耐と関連する性質が愛の特性として強調されています。すなわちキレてしまわないこと、すぐにブツンとならないこと、むしろ辛抱し、長く持ちこたえることです。これとセットなのが真ん中の「信じ」、また「望む」です。これは、もう終わりだと思って投げ捨てないこと。何よりも神を信じて、前に置かれているものを見つめて歩む姿勢でしょう。その神への信頼と希望は、人を信じ、人に望みを持つこととも関連します。人の悪い点や足りない点を見て絶望するのではなく、むしろ良い点を見出して、「すべてを信じ、すべてを望む」という態度で関わる。このような信頼と望みを抱いてこそ、「耐え」また「忍ぶ」歩みができるのもあるのでしょうか。

私たちはここから何を学べば良いのでしょうか。ある人はこう言いました。この「愛」という言葉をすべて「イエス様」に置き換えると、より具体的に一つ一つの言葉のイメージがわいてくると。4 節をやってみます。「イエス様は寛容であり、イエス様は親切です。また人をねたみません。イエス様は自慢せず、高慢になりません。」 5 節以下もそうです。イエス様は「礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。」まさにイエス様の生き方そのものです。またある人はこう言っています。そこに自分の名前を入れてみると良いと。4 節以降、今度はそれぞれご自分の名前を「愛」の代わりに入れてみてください。あまり気が進みませんが、私の名を入れてみるとどうでしょうか。「阿部大は寛容であり、阿部大は親切です。また人をねたみません。阿部大は自慢せず、高慢になりません。」とてもこれ以上、続けられません。いかに現実には程遠いかを思われます。そして私たちがそうであることが日々の生活で周りの人々の関係を壊し、益ではなくて、害をもたらしているのではないのでしょうか。いかに良い賜物がそれぞれに与えられていても、愛というこの道を進まなければ確かに良いことに至りません。すべてが無くなってしまいます。どうすれば良いのでしょうか。聖書はそのための道筋があることを示しています。ヨハネの手紙第一 4 章 19 節：「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」 私たちの愛は神から始まります。愛である神に愛さ

れ、神の愛から学ぶ時、私たちもその神の愛を映し出す者となることができると聖書は語っています。

今日から御子の降誕を待ち望むアドベントの期間となります。神は御前に汚れていて、さばきこそふさわしい罪人の私たちを、ご自身から出る愛で愛し、尊い一人子を遣わしてくださいました。ここに「神の愛が私たちに示された」とヨハネの手紙第一 4 章 9 節は語ります。そして私たちのところに来てくださったイエス様は、まさにこの I コリント 13 章が語る愛の道を歩まれました。その神とキリストのお姿を今日の御言葉一つ一つの背後に見て、このアドベントの時、感謝をささげる者でありたいと思います。ローマ人への手紙 5 章 5 節に、私たちの心に神の愛を注いでくださるのは聖霊であると言われています。その聖霊が私たちの内に愛、喜び、平安、・・・で始まる御霊の実を結んでくださいます。私たちはこの愛の章を読んで、自らの愛が足りないことを思うなら、一つ一つの御言葉の前に悔い改めて、神の愛が自らの内に実を結ぶように祈り求めたいと思います。そしてこの愛という道を進む中で、私たちに与えられている賜物が最も良く力を発揮し、神の御心にかなう歩みをささげることができますように。そして神が備えてくださった救いの素晴らしさを豊かに体験し、神に栄光を帰す神の教会の歩みへと導かれて行きたいと思えます。